

「しゃち」と「しゃちほこ」について ②

おやさと研究所教授
佐藤 孝則 *Takanori Sato*

前号で、「しゃちほこ」は、『和漢三才図会』では想像上の動物「魚虎」として紹介し(図1)、姿は魚で頭部は虎の顔、尾びれは常に天を向き、背中にはいくつもの鋭い刺をもつ、と説明されていること、また、江戸時代から「しゃち」と「しゃちほこ」は同義語として使われ、クジラの仲間のシャチと、「魚虎」の二つの意味に理解されていたこと、そして「魚虎」に対しては「鯨」、「鯨鋒」という国字があてられたこと、などについて紹介した。

1712(正徳2)年、大阪の医師・寺島良安が出版したとされる『和漢三才図会』は、明治の初めころまで庶民に広くゆきわたっていた当時の百科事典で、ロングセラーの一般普及書だった。この本は、幕末から明治にかけて生きていた当時の人たちにとって、とくに自然科学に目を向ける人にとっては、座右の書であったにちがいない。博物学的にも、興味深い挿絵がたくさん含まれているのが特徴である。



図1 「魚虎(しゃちほこ)」。『和漢三才図会』(東洋文庫版)より引用。

粘菌研究では世界的に有名な1867(慶応3)年生まれの南方熊楠は、8歳から『和漢三才図会』を読み始め、少年時代には全105巻81冊を読破し、そのすべてを筆写したという。この本は熊楠を強くひきつけただけでなく、一般庶民にも親しまれ、150年以上にわたって愛読されてきた。まさに、この本をとおして、近世から近代初めに生きた人々の、物事の捉え方や自然に対する知識・意識を垣間見ることができると考えている。

既述したように、「しゃちほこ」は「魚虎」であり、「姿は魚で頭部は虎の顔、尾びれは常に天を向き、背中にはいくつもの鋭い刺をもつ」想像上の動物、すなわち、図1に示す生きものである。この生きものは、棟飾り瓦の一つで、名古屋城や姫路城などのお城の天守閣や、お寺(図2)、裕



図2 中国・四川省「峨眉山華藏寺」(標高3,077m)の欄干に取り付けられている「魚虎」。

として取り付けられている「鯨」であって、クジラの仲間のシャチではないことは明らかである。

『広辞苑』によると、「しゃちほこ」は「マツカサウオの方言」とある。このマツカサウオという魚は体長およそ15cmで、

からだ全体には強靱な鱗があり、腹や背のひれに強大な刺をもつ(図3)。英語では「ナイトフィッシュ」(騎士の魚)と呼ばれている。本州中部以南の外海の磯に棲息する。



図3 マツカサウオ。「ぼうずコンニャク」Web (<http://www.zukan-bouzu.com>)より引用。

この魚は、『和漢三才図会』の「魚虎」のように、顔は虎のようにいかつく、からだ全体に鱗や刺がある。鱗の形状も類似する。ただ、この魚については、『和漢三才図会』の中では紹介されていない。ということは、原本となる中国の『三才図会』にも記載されていないということの意味する。それだけ、この魚はポピュラーではなく、知名度も低かったのではないか。このことは、幕末から明治にかけての庶民には、この魚はほとんど知られておらず、むしろ、明治以降になって広く存在が知られるようになったことを示唆している。それゆえ、「しゃちほこ」に似た魚という意味で、ある地方の人たちがこの魚のことをこのように呼んだのではないかと類推する。

以上に示したように、当時の庶民にとって、「しゃちほこ」は、クジラの仲間のシャチではなく、また魚類のマツカサウオでもなく、むしろ『和漢三才図会』で紹介された「魚虎」、すなわち「鯨」だったと考える。この「鯨」は、大和地方のお寺の屋根瓦など、あちこちの屋根の棟飾り瓦として取り付けられている(図4)。つまり、一般庶民の「しゃちほこ」



図4 お寺や一般家庭の屋根に飾られている「鯨」。

のイメージは、このような「鯨」ではなかっただろうか。

「鯨」の姿形は、尾の先をまっすぐ天に向けて“逆立ち”しているかのように、まるで身体が突っ張っているように見える。また、いかめしく構えたような姿勢や、緊張してかたくなってしまふような姿から、「鯨張る」という表現が、「しゃち(ほ)こばる」、「しゃちよこばる」、「しゃちばる」などとなり、「しゃちほこ立ち」のような別表現も生まれたりする。

『天理教教典』の「第三章 元の理」には、月日親神が、「男雛型」と定めた「うを」に「しゃち」の「骨つぱりの道具」を仕込んだとある。これは、「うを」すなわち「鯨魚」であるサンショウウオに、「しゃちほこ」の「骨つぱりの道具」が仕込まれたということの意味する。つまり、サンショウウオに「鯨張る」道具が仕込まれた、というような解釈も成り立つことになる。